

time) で呼吸停止下でポラロイドフィルムに撮像した。

(結果) 肝機能正常者, 急性肝炎, 慢性肝炎および肝硬変症の多くの症例でシンチグラム上の肝左右葉境界は解剖学的境界と一致していた。しかし肝硬変症の1部—右葉が背側へ, 左葉が腹側ヘローテーションしている症例では, シンチグラム上 Cantlie 氏線で境されているがごとき所見を呈していたが, 剖検と比較検討したところやはり解剖学的境界によって境されているように思われた。これについてさらに症例を加え検討したい。

16. 体位変換による肝の形態学的変化(前面像と右側面像について)

○油野 民雄 利波 紀久 久田 欣一
(金沢大・核医学)

肝は可塑性に富む臓器であり支持靱帯も鎌状, 三角, 冠状靱帯と比較的乏しく, 従来より呼吸時や体位変換時, 著しい肝の移動ならびに形態学的変形を示すことが指摘されてきた。今回, 我々はシンチカメラを用いて肝シンチグラフィを施行し, 体位変換による肝の形態学的変化を観察し, 肝欠損部の鑑別(肝内性か肝外性か), 肝の硬度的変化に伴う肝変形度(体位変換時)に関し検討を加えた。

方法は, ^{99m}Tc -スズコロイド, ^{99m}Tc -フィチン酸, 12~15mCi 静注20~30分後に15~20秒間呼吸停止下にて前面像(仰臥位, 左右デクビタス, 一部立位), 右側面像(仰臥位, 左デクビタス, 一部立位)を Pho/Gamma III カメラを用いて得た。正常例では, 体位換時, 前面像, 右側面像ともに著明な形態的变化を示した。また, 正常例, 病的例とも, 体位変化に伴う肝脾の回転が生じたと思われる右デクビタス前面像での脾の RI 活性の増加, 左デクビタス前面像での肝右側 RI 活性増加所見を認めた。また, 胆のう床, 肝静脈, 腎臓圧痕など生理的外因子による欠損例では, 体位変化に伴いこれらの欠損の消失を認めたのに対し, 肝

内性 true mass による欠損例ではほとんど変化を認めなかった。さらに, 肝硬変症, 肝線維症など肝の硬度増加例では, 正常例に比べ, 体位変換に伴う肝の形態的变化の乏しい所見を呈した。

17. ^{131}I -アドステロールによる副腎シンチグラフィ(第1報)

○佐々木常雄 渡辺 道子 田中 良明
大島 統男 小幡 康範 牧野 宣一
(名大・放)

^{131}I -アドステロール 1 mCi を静注し, 投与後7日, 8日, 9日目の3日間 Nuclear Chicago 社製 Pho-Gamma III 型シンチカメラを用いて両副腎部を腹臥位において背部からシンチフォトを撮影する。なお投与前, 甲状腺に対してヨードブロックをしておく。検査の対象は C.S., P.A., Pheo, Hypertension の各症例であり, 非手術例・13例, 手術例10例の23例である。副腎描出の程度を読影良好(++)、読影可能(+)、読影不良~不能(±~-)に分けて評価した。C.S.では(++)13例, (+)4例, (±)1例。P.A.では(++)2例, (+)2例, (-)1例。Pheo.では(++)1例, (+)3例, (-)1例。Hypertensionでは(++)2例, (+)7例, (±)1例である。またシンチフォト像では(++)と(+)は13例, ドットスキャン像では(++)なし, (+)11例, (±~-)は3例であり, 副腎シンチはかなりよく正常副腎ならびにその腫瘍を示すことがわかる。

18. マクロオートラジオグラフィによる ^{99m}Tc -DMSA と ^{203}Hg -クロルメロドリンの腎内分布の比較

○安東 醇 土井下建治
真田 茂 平木辰之助
(金沢大・医技短)
久田 欣一 安東 逸子
(金沢大・核医学)

目的: 新しい腎スキャン剤 ^{99m}Tc -Dimer-